

平井 聖・浅野伸子著／渡辺 洋訳

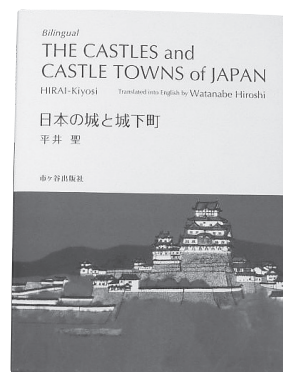
Bilingual The Castles and Castle Towns
of Japan

対訳 日本の城と城下町』

伊 東 龍 一

一冊の本を著者オリジナルの内容、図版で構成する。そんなことが可能であろうか。

学術的な内容をもつ本であれば、当該分野の長期に亘る研究成果の積み重ねをまったくは無視できないであろうから普通不可能に近い。しかし、本書は徹底したオリジナリティに貫かれている。それも既存の研究成果に対して多くの書き直しや再考を迫った内容である。もちろん著者自身の著作・論文においてすでに示されていた内容であるが、著者自身のものであることに間違いはない。加えて使用される写真や図版までも著者によるものがほとんどで、そのほかも共同執筆者の浅野伸子氏ら限定された方々による。また、一見するとヴィジュアルで易しい内容に思えるが、熟読すると日本の建築を深く理解しようとするときに必要な事柄を、それも決して他書では示されていないことが記されていて、やや専門的に関心をもつ読者



2017年7月24日発行
市ヶ谷出版社
B5変形判 176頁
定価 本体2400円＋税

をも満足させる。さらには著者が長い研究の道の中でも未だ明らかにしていない、しかし重要だと考えている課題について公にしているのである。

本書は「日本建築バイリンガルテキスト」という、日本人のみならず、日本の建築を知りたいと考える外国人が読むことを前提に編まれたシリーズの中の一冊である。全体は「江戸時代の城と城下町」と「日本各地の城」の二章からなる。章のタイトルでわかるように、この本では中世以前の城は扱っていない。「江戸時代の城と城下町」では、姫路城、金沢城、福井城、熊本城、上田城といった、著者が復元や整備に深く関わってきた熟知した城の具体例をもとに、城や城下町の構成や構造・意匠などについて述べている。また、「日本各地の城」は日本全国の城の写真による紹介である。文章による詳細な説明はないが、著者や浅野氏等の撮影された写真は個々の城の見るべき

「価値」を示していて、どの城を訪ねようか、城のどこを見るかを考える際に役立つガイドブックとなっている。

内容を具体的にみよう。「05 菱の門、西の丸」の「西の丸御殿」(二頁)は、江戸時代の図面(絵図)に関する著者の研究成果によるもので、姫路城を描く中根家所蔵の図面「中根図」を検討している。「中根図」では、建物と建物をつなぐ廊下が、直角につながっていません。玄関とほかの建物が、平行に並んでいません。このことは、元の図面が、台紙に別の色紙で作った建物平面を貼り付けて作られていた貼絵図(94頁参照)で、時代とともに貼った建物平面がはがれ、貼りなおしたことを物語っています。原図を、建築が専門でない人が書き写して、この図面が作られたという経過を示唆しています」として、この絵図がどのように出来上がった図であるのかを示す。その上で、同じ姫路城を描く他の図面と比較検討をしたのが、「06 三の丸の御居城(西屋敷)」(二三頁)である。「橋本政次氏が紹介された絵図では、玄関は「とらの間」です。「とらの間」には、入口の敷台が付属しています。中根図の「虎之御間」には、敷台の脇に二階建ての部分が増築されていて、入り口ではなくなっています。また、橋本氏の絵図には、休息ノ間がありません。新書院の中

の間取りが違い数寄屋（茶室）がありません。橋本氏の絵図のほうが、古い時代の様子を示しているのでしょうか。」とあって、二つの図が示す御殿の平面（間取り等）を比較してその時代による変化を検討する。単にわかった成果を披露するのではなく、絵図という史料を読み解くことの面白さを示しながら、興味をもつ読者を研究という次のステップへ誘っているようである。

次の「07 三の丸の向屋敷」（二五頁）では、この屋敷の中の「唐笠間」に注目して、絵図には描かれていないその建物の構造（ここではデザインと不可分）を次のように推定している。「8間四方もある大きな部屋で、柱は真ん中に1本あるだけです。その柱は、3尺角。構造を推理すると、傘の骨に当たる登り梁が周囲から頂点に向かって放射状にかかり、頂点をまとめ、登り梁の真ん中あたりを、中央の太い柱から斜め上に向かう材で支えていたのではないかと思えます。傘の骨のように周囲には支える柱はなくてもいいのです。」このような推定は、建築のような三次元の構造物を考えるときには極めて重要なことで、デザインとしても注目すべきものであったことを著者自身の手書きの図で示している。

そしてすぐに次のように続ける。「この部屋には、長い炉がありました。どのように使ったのでしょうか。」と。唐笠間については、この文章の

わずか五行上で「くつろぎ、遊びの場であったことがわかります。しかし、この屋敷を使った時の記録が見つかっていません。」と記している。くつろぎの場にある長い炉の使用例は、比較的容易に見つけられるように思う。そこから用途の推定や想像もできる。しかし、「屋敷を使った時の記録が見つかっていません」という一文からは、確たる史料に基づく歴史的考察の重視がうかがえる。推定も重要であるが、できれば推定ではなく史料という根拠をもって明らかにしたい。その根拠の重要性が易しい言葉で語られている。

また、「記録が見つかっていません」は、研究状況の現在地を明確にして研究としては決して完結していないことを示すと同時に、今後に期待する態度が示されている。振り返れば『日本住宅の歴史』（日本放送出版会 昭和四七年）において、著者は日本住宅の通史を描き、その「あとがき」で「この本は私これから勉強しようとしている問題を、あらかじめ公開しようというものである。」と述べ、今後解決すべき問題を「公開」していた。本書においてうかがえるのも同じ態度である。

著者のオリジナルな研究成果に基づく記述はほぼ全編にわたるが、代表的な例だけでも、床（の間）や違棚、付書院の配置のルール（書院造の座敷飾の定型配置）を記した「55 城内の御殿・城下の藩士の屋敷―1（書院造）」（二二頁）や、南北

という方位よりも道路側であるか否かを意識して決定される武家住宅の平面について（これは現代住宅において何も考えることなしに南向きにリビングを配置しようとする態度を批判することにもなる）を記した「57 城内の御殿・城下の藩士の屋敷―3 城下の家臣たちの住まい」（二五頁）等をあげることができる。

また、このほか著者が紹介する、実現していればほぼ三六〇度の展望を可能にしたであろう姫路城天守最上階の窓の計画（38 城の構成―5 姫路城の天守の構成）七七頁）や上田城の心柱のある櫓の報告（42 天守・櫓の構造と意匠―4 八五頁）といった興味深い事実は、目につきにくい報告書等の中に埋もれるように記された内容で、著者によって丁寧に発掘されて提示されたものともいえる。説明に用いられた著者手書きの図には「（石垣の）上面全体が糸巻状になっています。」（五一頁）と記す部分に添えた糸巻の図がある。外国人向けの本だからであろう。しかし、意外に糸巻がわからない日本の若い世代に向けて描いた図のような気もする。

オリジナルな研究成果とオリジナルな図版。徹底しているのである。

（いとう りゅういち

熊本大学大学院先端科学研究部教授）